

マーク・トゥエインにおける 反帝国主義運動の思想的淵源

佐 野 潤一郎

Argument of Mark Twain's Anti-Imperialism

Junichiro Sano

Abstract

Mark Twain presents various anti-imperialistic speeches and writings in the latter period of his life. Twain accuses Civilization in China and the Philippines as American Imperialism in “To the Person Sitting in Darkness.” Although he religiously and politically accuses Civilization, he rather satirizes the adherents who support it without value judgement by themselves: for he uses the same word — Civilization — as a punch line in the same way in “The Dervish and the Offensive Stranger.”

By way of illustration, citations from *The Innocents Abroad* show Twain's point of view. He insists that there is no assurance in the people who depend on authority without examination by themselves. In *The Autobiography of Mark Twain*, he indicates kindred implicit faith in religion and politics allegorically, illustrating superstitious idea about depilation. Besides, the theme of “True Patriotism at the Children's Theater” comes from his skepticism against artificially created public opinion; he criticizes his contemporaries' non-examined opinion that makes their public pronouncement, such as a Civilization policy, merely at second hand. However, he supported the Children's Theater at once to educate coming generations to think and act for themselves.

はじめに

マーク・トゥエインは、1900年のアメリカへの帰国から1910年4月21日に74歳

で亡くなるまでの十年間、アメリカの政治と宗教を事例的に批判する内容の作品を多く残している。その批判対象は、トゥェインが関与した組織の名称「反帝国主義者同盟」(Anti-Imperialists League)に端的に示される。

この時期の作品群は、手紙や新聞に掲載されたインタビューも含めて、*Mark Twain's Weapon of Satire*に収録されている。これを主要な文献とし、『マーク・トゥェイン自伝』(*The Autobiography of Mark Twain*)やトゥェインの宗教批判の嚆矢とも言うべき作品*The Innocents Abroad*などを援用し、帝国主義批判の思想的淵源を辿っていきたい。

1. 社会情勢

19世紀から20世紀への変わり目に当たる時期は、世界各地で帝国主義政策とそれに反発する勢力の間で戦争が起きていた。南アフリカではボーア戦争、中国では義和団事件、キューバとフィリピンではスペインからの独立闘争等、いわゆる列強(the Great Powers)と呼ばれる国々に対して、その支配に抗う人々が戦っていた。

1898年、アメリカはキューバとフィリピンでスペインに宣戦布告し(米西戦争 Spanish-American War)、一方的な勝利を収めた。アメリカは大義名分としてスペインからの植民地の解放と住民による自治を標榜したが、殊にフィリピンの解放運動指導者達は支配者がスペインからアメリカに移ったものと認識し、解放闘争は次第に激しさを増して行った。このような世界情勢の中、アメリカの帝国主義化に懸念を表明し、反対の論陣を張っていたのが反帝国主義者同盟である。

1900年10月、64歳のマーク・トゥェインは家族と共にイギリスからアメリカに帰国すると同時に反帝国主義者同盟の有力な論客となり、同盟はトゥェインのスピーチやエッセイを出版し、反帝国主義運動の論拠とした(MTWS 24)。

2. 利己的な理由と目的

トゥェインは反帝国主義運動へ関与しはじめた1901年1月、友人トウィッチェル牧師(Twicheell, J. Hopkins, 1838-1918)へ宛てた手紙の中で、“You are supposing that I am supposing that I am moved by a Large Patriotism . . . , — drop that ideal” (MTWS 21)と述べ、自らの動機を愛国主義(Patriotism)によるものと思わないように注意を喚起したうえで、“Whenever a man feels or thinks or does, there is never any but one reason for it — and that is a selfish one.” (MTWS 21)と、自らの行動が「利己

的な理由(selfish one [reason])」によるものであることを示唆している。

また、この引用箇所が続いて、貧しいユダヤ人少女達の学校の為にユダヤ教徒の集会で慈善講演をしたことが述べられており、ここでも「利己的な目的(selfish end)」を動機として示している。

この反帝国主義運動への関与の「理由(reason)」と慈善講演の「目的(end)」のふたつに共通する形容「利己的(selfish)」が何であるかを考えるために、実際の作品とその内容について分析し、その上で改めて「利己的」の価値判断が何に由来するかを考察する。

3. Civilization 批判

反帝国主義に関する代表作“To the Person Sitting in Darkness”は先述の手紙から一カ月後の1901年2月、雑誌ノースアメリカンレビュー(*North American Review* 172 Feb. 1901)に発表された。題名は聖書の『詩篇』(Psalms)からとったものと思われる。また、トゥェインがPerson Sitting in Darknessを大文字で使っていることから、この詩篇を踏まえた上での寓意が含まれていると思われる。作品中でthe Person Sitting in Darknessに相当する人物像として描かれているのは、帝国主義列強の外圧に苦しむ人々、特に中国の農民とフィリピン人である。

義和団事件(the Boxer Rebellion, 1900)において、中国に居住するキリスト教徒は米帝国主義の走狗と見なされ、義和団の殺害対象となった。事件が鎮圧された後、合衆国はキリスト教団体再興の為、アメント牧師(Rev. William Ament)と布教団を中国に派遣する。アメント牧師は、中国におけるキリスト教再布教の活動費に充てるという名目で、中国政府に過酷な賠償額を提示した。

“To the Person Sitting in Darkness”の前半でトゥェインはアメント牧師に対する批判を展開している。そのような賠償請求は中国政府による中国人農民搾取に結びつくだけであるとして、キリスト教布教というCivilizationと、それに伴って搾取が発生することの矛盾を突く。この点で、搾取対象となる人々をthe Person Sitting in Darknessと呼称する事により、聖書の比喩を諷刺に用いているとも言えよう。詩篇の「神の言葉に背いたが故に(Because they rebelled against the words of God.)やミと死の陰に座るもの」との文脈を踏まえて、誰が「神の言葉に背いた」のかを問い掛けているのである。

“To the Person Sitting in Darkness”の後半において、トゥェインはフィリピンに言及する。スペインからの独立運動に乗じた米軍が、スペイン撤退後もなお、フィリピンに駐留している事に疑問を投げかけ、米政府の介入がthe Person Sitting in

DarknessのCivilizationを目的としたものであると総括する(MTWS 34)。ここにおいてトゥェインは文脈上「フィリピン人」(Filipinos)と置換可能な場所にthe Person Sitting in Darknessを使っている。

トゥェインに対して反対の論陣を張った人々の多くが、中国での布教活動とフィリピンでの政治支配は同一次元で論じられるものではなく、それを混同しているトゥェインの論には妥当性が無い、と指摘した(MTWS 22)。これについては、トゥェインが中国農民とフィリピン人に言及する場合the Person Sitting in Darknessという寓意を含んだ同一呼称で示すと同時に、Civilizationの被害者であるとしてる点に注目したい。

では、布教と戦争をCivilizationという概念を足掛かりとして統一的に批判するトゥェインの視点はどこから来るのか。“To the Person Sitting in Darkness”から一年後に書かれた“The Dervish and the Offensive Stranger”は、the dervishとthe offensive strangerの対話が大部分を占めているが、その途中にvoices out of Utahと題された幕間劇のようなパラグラフが挿入されている。voices out of Utahはふたつの対照的な演説から成り立っており、ひとつは白人の指導者が彼の率いる集団に呼びかけるもの、もうひとつは、ネイティブアメリカンの指導者が彼の部族の人々に呼びかけるものである。

Voices out of Utah

The White Chief (to his people) : This wide plain was a desert. By our heaven-blest industry we have dammed the river and utilized its waters and turned the desert into smiling fields whose fruitage makes prosperous and happy a thousand homes where poverty and hunger dwelt before. How noble, how beneficent, is Civilization!

Indian Chief (to his people) : This wide plain, which the Spanish priests taught our fathers to irrigate, was a smiling fields, whose fruitage made our homes prosperous and happy. The white American has dammed our river, taken away our water for his own valley, and turned our field into a desert; wherefore we starve.

(MTWS 148-149)

白人指導者(The White Chief)が言うところの「天の祝福する産業」(heaven-blest industry)は、河を塞ぎ止め砂漠を沃野に変え貧困と飢餓から人々を救う。その同じ産業はネイティブアメリカンの土地を砂漠化し水を奪い飢えへと追いやる。白

人指導者の無邪気さとネイティブアメリカンの悲惨さとの対照が、諷刺のpunch lineとなっており、白人指導者の無邪気さがCivilizationという語で象徴的に表される。ここでは、「天」という宗教的権威が「祝福した」と見做すことによってCivilizationを正当化している点に注目したい。Civilizationと宗教的概念との結びつきが示されている箇所である。

以下に、宗教的概念をpunch line化するトゥェインの手法を検証する事で、トゥェインの信仰観と、それがCivilization批判にどのように結びつくかを検討する。

4. 「権威」的語彙のpunch line化による批判

宗教的権威による正当化と表裏をなすものが、宗教的権威による否定である。これについて、初期の作品*The Innocents Abroad*に「罰当たりな技術」という表現がある。作品の発表時期は異なるが、「天の祝福する産業」と対になる概念だと思われるので、次に*The Innocents Abroad*からふたつの例を引く。

There is not a modern plow in the islands, or a threshing-machine. All attempts to introduce them have failed. The good Catholic Portuguese crossed himself and prayed God to shield him from all blasphemous desire to know more than his father did before him. (IA 44)

引用した章は、アゾレス諸島のカトリック教徒を描いたものである。ここでトゥェインが描いているのは、近代的な農機具を「罰当たりな」(blasphemous)ものとして拒否する、という宗教的価値判断である。

近代的農機具という対象を宗教的価値判断によって拒否することで、宗教という「権威」から許される範囲を信仰者みずからが規定し、その範囲を超えないことを自らに課していることを、読者に提示している。想定される読者は、近代的農機具を信仰に抵触しない道具として扱う社会に属しているので、その視点からすると、「罰」を恐れてわざわざ不便を忍んでいるというのは滑稽であると言えるだろう。この場合、読者が「罰」に対する畏怖を共有していないからこそ、「罰」という宗教的価値基準に基づく判断が滑稽に見え、その故にpunch lineとしての効果が発揮される。

また別の章では、アメリカ帰りのイタリア人「報告者」が郷里の人々の前で報告会を持つ、との設定で、カトリック教徒のイタリア人報告者に次のように語らせている。

“If I [an Italian traveler] dared, I would say that sometimes they use a blasphemous plow that works by fire and vapor and tears up an acre of ground in a single hour — but — but — I see by your looks that you do not believe the things I am telling you. Alas, my character is ruined, and I am a branded speaker of untruths.” (IA 213)

ここでも近代的な農機具が話題になり、「罰」の概念を共有していない読者にとって、「罰」の概念の共有を確認することで聴衆との距離を縮めようとする報告者の努力と、それが無駄に終わった結末の両方がpunch lineとなる。

このように、読者が作品中の人物と「罰」の概念を共有していないからこそ、「罰」という言葉が文脈上違和感をもって解釈され、punch lineとしての文学的效果が生まれる。

同様に、voices out of Utahでも宗教的語彙がpunch lineとして効果を発揮するのは、読者が「天の祝福する産業」という概念をトゥェインの描く白人指導者と共有していない場合である。

この点で、トゥェインは読者との間で、「祝福」による正当化の側面にもせよ、「罰」による否定の側面にもせよ、「宗教的概念を基準にした価値判断が現実から乖離していることを滑稽に思う」という共有感を確認するために、価値判断を含んだ宗教的語彙を用いているのだと言えよう。その共有感が再びpunch lineとしての効果を高めているといえる。

5. 価値判断の他者依存批判

これまで、信仰者の「宗教的概念による価値判断」についてみてきたが、それでは信仰者と宗教的権威の関係について、トゥェインはどのように認識していたのであろうか。それを示す箇所が『マーク・トゥェイン自伝』(*The Autobiography of Mark Twain*)にある。

In my schoolboy days I had no aversion to slavery. I was not aware that there was anything wrong about it. No one arraigned it in my hearing; the local papers said nothing against it; the local pulpit taught us that God approved it, that it was a holy thing, and that the doubter need only look in the Bible if he wished to settle his mind (AMT 7)

そういう私でも、小学校時分は奴隷制度を毛嫌いすることも無く、また、この制度に不都合なところがあるなどとは思ってもみなかった。制度を批判する声は聞かれなかったし、おまけに田舎の新聞は奴隷制度に反対する記事を載せなかったし、町の教会へ行くと、牧師は壇上から、奴隷制度は神が認めた神聖な制度であって、このことにいささかでも疑問をはさむ向きは、ちょっと聖書を開いてみれば、それがたちどころに氷解するはずだと説いていた——
(自伝16)

奴隷制度を、町の「牧師」(the local pulpit)という宗教的権威の代弁者が「神聖な制度」(a holy thing)だと保証していた、との内容である。トゥェインの小学校時分は奴隷制度が機能していた時期であり、当時トゥェインが住んでいたミズーリ州は奴隷制度を認める州であった。しかし、トゥェインの青年期に南北戦争が勃発し、北軍の勝利により奴隷制度は社会的不正義とされ、廃止された。これは教会で牧師が説いた「神聖な制度」説の破綻を意味するものである。

個々人が価値判断するとき、既存の価値体系に基準を求めることは、トゥェインの時代においても、現代においても一般的であろう。トゥェインが『自伝』で描いた「小学校時分」のコミュニティは、奴隷制度に関して他者である牧師の価値判断に依拠していた。この場合、牧師という社会的立場から発生する宗教的権威が判断基準としての信頼性を高めている。それが破綻することにより、牧師の判断を受け入れた信仰者は同様の破綻を経験する。「権威」に寄せていた信頼が、裏切られたとも言えるだろう。

それでは、信仰者は何を根拠に「権威」に信頼を寄せているのか。

「権威」への信頼が醸成されていく過程を、トゥェインは『自伝』で語っている。

...; when I hunt him remorselessly home he has to confess at last that “everybody says” water rots the roots of the hair.

Strange — it is just like religion and politics! In religion and politics people’s beliefs and convictions are in almost every case gotten *at second-hand*, and without examination, from authorities who have not themselves examined the questions at issue but have taken them at second-hand from other non-examiners, whose opinion about them were not worth a brass farthing. (AMT 401)

さらに容赦なく問いただすと、水は髪の毛のつけ根を腐らすと「みんなが言って

いるんでね」と、とうとう白状しなければならなくなる。

妙な話だ——まさに宗教や政治と同じではないか！ 宗教や政治に対する信仰や信念は、たいていは問題点をろくに調べもせず、その道の専門家の言うことを鵜呑みにする。その専門家といえども肝心の問題点を必ずしも自分で調べているわけではなく、これまた実際に調べたことのない人の意見を間接的に受け入れているのである。こうした人の意見など一文の値打ちもない。

(自伝 462-463)

宗教的信仰と政治的信念は、自ら考えたものではなく「その道の専門家の言うことを鵜呑みにする」(gotten at second-hand, and without examination, from authorities)ことによって成立しているとトゥェインは喝破する。「専門家」(authorities)の価値判断を借用しながら、それをあたかも自分自身の価値判断のように錯覚している点を突き、また、そのような「実際に調べたことのない人」(non-examiners)への依存の連鎖によって、世論が成り立っているとの指摘である。いわば、世論存立の根拠は「みんなが言っているんでね」("everybody says")という連鎖それ自体への依存に他ならない。

ここで、トゥェインが「依存の連鎖」を宗教的信仰と政治的信念の共通性としている点に注目したい。(Strange — it is just like religion and politics!) 中国における布教とフィリピンでの戦争をCivilizationという概念を足掛かりとして統一的に批判するマーク・トゥェインの視点はここに明らかである。つまり、Civilizationの内実はともかく、宗教的・政治的に権威付けられたCivilizationを支持する世論に対して、その世論の基盤となるはずの個々人の価値判断がなされていない事(at second-hand)を告発するものとも言える。マーク・トゥェインの宗教批判と政治批判は、教義論争やイデオロギー批判によるのではなく、むしろ宗教的信仰と政治的信念を成立させている、個々人の「権威」依存を批判したものであった。

トゥェインの批判対象が特定の教義やイデオロギーではなく、このように「依存の連鎖」に加担する全ての人々を対象としたことは、トゥェインの批判活動を遙かに困難にしたであろう。このことは晩年に顕著に見られる悲観的思考のひとつの根源になっているとも思われる。しかし、トゥェインは悲観を以て自らの社会活動を打ち切ることをしなかった。その中でも、「最も重要な仕事」とトゥェイン自身が見做していたのが、次の世代との関わり、つまり子供たちの教育に関わる事業である。

6. 「愛国主義」批判

トゥェインは最晩年とも言うべき1907年から死の前年の1909年まで、移民の子供達のための教育機関として設立された劇場の運営に関与していた。この時期に、*Brooklyn Daily Eagle*誌に掲載されたインタビュー記事が“True Patriotism at the Children’s Theater” (Nov. 24, 1907)である。

And this so-called patriotism we mistake for citizenship; but if there is a stain on that flag it ought not to be honored, even if it is our flag. The true citizenship is to protect the flag from dishonor — to make it the emblem of a nation that is known to all nations as true and honest and honorable. And we should forever forget that old phrase — ‘My country, right or wrong, my country!’ (MTWS 188)

トゥェインは、「いわゆる愛国主義」(so-called patriotism)をcitizenshipと取り違えている事が問題であると指摘する。また、当時のアメリカで頻繁に用いられていたフレーズである“My country, right or wrong, my country!”を忘れ去るべきだと主張する。

「愛国主義」の内容は“right or wrong”というフレーズに象徴されるように、個々人が善悪の価値判断を他者に依存し、「国」が「自分のものである」(my)という事に至上の価値を置くことである。自らの善悪の価値判断を停止し、善悪よりも所属に重きを置くこと、これも所属する対象の価値判断をしないという点、また所属する対象に価値判断を委ねるという点で「依存」である。「依存」の対象がここでは「国」として示される。「国」の存在価値如何に対する批判ではなく、「国」を依存対象として見做す「愛国主義」への批判である。

これは、先に取り上げたティッチェル牧師にあてた手紙における、自らの動機が「愛国主義」であるとは思わないで欲しい、という言説と一致する。「権威」への依存を告発するトゥェインの立場としては当然だといえる。もし、「愛国主義」に依拠して「権威」への依存を批判するとすれば、トゥェインの論法では、「権威」に依存して「権威」を批判するというトートロジーに陥るからである。

このように、トゥェインは「愛国主義」を反価値として認識する。それに対して、正価値として認識されているのがcitizenshipである。

トゥェインは、子供劇場における子供たちに対する教育がtrue citizenshipを育てることに力点を置いていると述べ、citizenshipの内容について言及している。

“And best of all, they [children of the theater] are taught to act for themselves and to

think for themselves. It is this self-thinking that goes to make up the true public opinion. We say we have public opinion in America. We have none. We only think second hand.” (MTWS 188-189)

『自伝』でトゥエインがsecond handという語で批判した価値判断の他者依存が、ここでも同様の語で表されている。Weで示されるトゥエインの同時代人がsecond handの思考しか持ち得ないとトゥエインが認識しているのに対し、次世代のself-thinkingこそが真の世論を形成すると期待するのである。インタビュー記事の最後で“*It is the most important work of my life!*” (MTWS 189)と述べていることから、トゥエインが子供劇場への期待が大きさがうかがえる。

結び

トゥエインの想定する「権威」とは、論拠の他者依存の連鎖により、遡及的に検証しても依存が循環するだけの空虚なものである。その上で、彼の同時代人がcivilization, blasphemous, patriotismといった社会的概念に象徴される「権威」に関して、検証を他者に依存している点を、トゥエインは「価値判断の依存」として批判しているのである。反帝国主義者同盟を活躍の場としながら、彼の批判はそれまでの作品に一貫してみられる「価値判断の依存」全般に及んでいるといえる。

ティッチェル牧師にあてた手紙では、トゥエインはそのような反帝国主義の言論活動が「利己的な理由によるもの」とであると述べ、決して「愛国主義」によるものではない、と強く否定した。もし「愛国主義」による活動であるなら、「権威」に依存して「権威」への依存を批判するというトートロジーに陥る。したがって、「権威」への依存に対する批判は、「権威」以外のものに依拠する必要がある。そこで、トゥエインが見いだしたのが「利己」であったといえる。civilization, blasphemous, patriotismといった社会的「権威」を行動原理とせず、「利己」の為に自分の尺度で行動を律する、というのが、トゥエインのいう「利己的な理由」の内容である。つまり「利己的」であることそれ自体によって、トゥエインは「権威」を冷笑し、批判するのである。

トゥエインは更に、自ら価値判断をする事、すなわちトゥエインの言葉によるとcitizenshipを次の世代に期待し、子供劇場における教育を支援した。同時代人の「権威」への依存の連鎖によって成立する世論に対して悲観的に冷笑しつつも告発を続けたトゥエインにとって、次の世代を育てることは彼自身の悲観を克服

する試みだったのではないか。

引用文献

- AMT Neider, Charles, ed. *The Autobiography of Mark Twain* NY: Harper, 1975
 IA Twain, Mark *The Innocents Abroad* NY: Literary Classics of US, 1984
 MTWS Zwick, Jim, ed. *Mark Twain's Weapon of Satire* NY: Syracuse UP, 1992
 勝浦吉雄 訳『マーク・トゥェイン自伝』東京：筑摩書房 1984

註

『詩篇』における該当箇所は以下の通り。

Psalms |107:10 *Such as sit in darkness and in the shadow of death, being bound in affliction and iron;*

Psalms |107:11 *Because they rebelled against the words of God, and contemned the counsel of the most High:*

- * (附記) 本稿は英米文化学会第17回大会(平成11年 9月11日、拓殖大学茗荷谷校舎：東京)に於ける口頭発表「マーク・トゥェイン晩年の帝国主義批判における宗教性」を改稿したものである。

